

2 産学官金連携による「福島市お弁当プロジェクト」

地元学生のアイデアを活かした名物駅弁の開発

福島県・福島市 | 東邦銀行

大学進学等に伴う若者の県外流出が課題となる一方、県内に留まって、地域の特産品やお祭りなど、地元の魅力を高めたいと思う若者も少なくない。このような若者の熱意を地方銀行が受け止め、産学官金連携で応援。地域の将来を担う人材の育成を支援するプロジェクトに取り組んだ。



福島わらじまつり (画像提供 福島わらじまつり実行委員会)



福島市の概要

- (人口) 283,606人 (2021年6月1日現在)
- ・福島県の県庁所在地。福島県の北部に位置し中核市に指定されている。
 - ・明治期から蚕種、生糸、織物の集散地として繁栄し、経済発展を遂げた。
 - ・福島県内第1位の農業産出額を誇り、特にサクランボ、モモ、ナシ、ブドウ、リンゴなど季節に応じて多種多様な果物を生産していることから、「フルーツ王国」の異名を持つ。
 - ・代表的な温泉地として、福島市の伝統工芸品のこけし発祥地として有名な土湯温泉や、国有数の高濃度硫酸泉で知られる高湯温泉がある。

若者世代に地域貢献の意識を喚起

大学進学等に伴う若者の首都圏への流出は、福島市においても大きな課題となっている。

これまで、東邦銀行は、福島市と連携して「女子高校生企業見学会」や福島大学と連携した「地域戦略研究会・地域戦略フォーラム」等を共催。若者に福島県経済の現状と将来の課題について関心を深めてもらったり、地域の産業構造や地元企業の事業内容について理解を深めてもらうなど、産学官金の連携によって若者の地元への関心、地域貢献の意識を高める取り組みを続けている。



地域戦略フォーラムチラシ(東邦銀行ディスクロージャー誌 2020年3月期)

福島市お弁当プロジェクトの立ち上げ

こうした取り組みを続ける中、福島大学の支援のもと、小・中・高生が福島市の未来を話し合うプロジェクト「ふくしまにぎわいろボ」を開催。参加した小学生から「福島市には有名な駅弁がなくて寂しい」との声が上がった。これをきっかけに、東邦銀行が地元スーパーや福島市役所に働きかけ、「福島市お弁当プロジェクト」がスタートした。

本プロジェクトに参加する学生は、福島大学「地方創生イノベーションスクール2030」のメンバーとして活動する福島市内の中学生、高校生、大学生。学生たちが福島市をアピールできる食材を使ったアイデアを出し合い、福島市が助言、地元スーパーがアイデアを踏まえて弁当を製造することになった。



プロジェクト概要図 (2021.3.13 ちいきん会福島資料)

学生発案「大わらじ福かつ弁当」の開発

アイデア出しの段階では、学生たちは“福島らしさ”に徹底的にこだわった。福島市の夏祭り「福島わらじまつり」では、“日本一のわらじ”を市民が担いで練り歩く。この福島市の象徴とも言える大わらじをお弁当のコンセプトにすることにした。



福島わらじまつり WEB サイト (画像提供 福島わらじまつり実行委員会)

お弁当に詰める食材は全て福島県産を採用。大わらじは、福島県特産の「エゴマ豚」を使った長さ15cm程のボリュームたっぷりのとんかつ。これを主菜として、ご飯は西会津産コシヒカリ、副菜として二本松産のキュウリの漬物、県北地域の郷土料理「ひき菜炒り」、県北産の桃を用いた白玉団子などを盛り合わせることにした。

包装のデザインは、SNSでの見映えを意識。福島わらじまつりの紹介や、2020年のNHK連続テレビ小説「エール」のモデルとなった福島市出身の作曲家、古閑裕而を紹介する文章も取り入れた。

こうして完成したのが「大わらじ福かつ弁当」。「福」には福島県の福、「福かつ」には震災からの「復活(ふっかつ)」の想いが込められている。



大わらじ福かつ弁当 (2021.3.13 ちいきん会福島資料)

Column

地方創生に資する魅力ある地方大学の実現

地方から東京圏への人口流出が止まらない。こうした人口流出は、大学進学タイミングで起こっており、その割合は人口流出者全体の約3割に上っています。

地方の将来を担う若者の流出を食い止めるためには、地方に学生を惹きつけるような産業・雇用を創出するとともに、地方大学がそのための人材を育成・輩出する必要があります。

政府の「魅力ある地方大学の実現に向けた検討会議」では、魅力ある地方大学の実現に向けて「選ばれる大学」となるようなニーズオリエンテッドな大学改革、知的・人的リソースの育成・輩出による地域でのプレゼンスの発揮などの改革の方向性が示され、文部科学省において環境整備の検討が進められています。

東邦銀行のネットワークを活かしたサポート

東邦銀行は、学生だけでは取組みが難しい地元企業、行政、福島駅への働きかけや交渉、商標登録の手続き等をサポート。コロナ禍で学生たちが集まるのが難しくなる中、SNSを使って議論の進行を支援し、約1年をかけて駅弁が完成した。



成果発表会の様子(東邦銀行ニュースリリース)

テレビや新聞で評判に

プレゼンテーションを担当した高校生からは、福島の復興支援に対する感謝の想いを込めて、東京五輪観戦(野球・ソフトボール予選)で県営球場を訪れる人々に無料でお弁当を配る構想が発表された。また、プロジェクトのきっかけとなった中学生(当時は小学生)からは、福島の魅力が詰まった自慢のお弁当の開発経験をもとに、子供のアイデアが実現される仕組みを全国に広めていきたいとの意気込みが示された。

発表会には、地元のTV局や新聞社などが取材に集まったこともあり、お弁当の注目度は高く、販売開始から約1か月で売上が100万円を突破。学生たちからは「お弁当の開発を通して地域を考えるきっかけになった」「復興支援への感謝の気持ちが込められたこのお弁当が、県内外の方々に愛されるよう継続してPR活動に取り組んでいきたい」との声があがっている。

今後の取組み

東邦銀行は、お弁当プロジェクトに参加した小・中・高・大学生が、地元のお祭りをベースに、地元食材や郷土料理を使ったお弁当を作り上げた姿を見て、想像以上に地元に対する愛情・誇りを持っていることを実感。「若者たちの地元愛、地域貢献の志を育てていくため、銀行のネットワークを活かし、若者が地域を考える機会や地元企業を知る機会を提供したい」と、地域の将来を担う人材の育成に向けた抱負を語る。



(出典) まち・ひと・しごと創生基本方針 2020